

令和7年度愛知県環境教育等推進協議会会議録

1 日時

令和7年10月21日（火）午前10時から午前11時30分まで

2 場所

愛知県庁 本庁舎6階 正庁

3 出席者

委員14名

4 傍聴人

なし

5 会議の概要

(1) 開会

(2) あいさつ

武田委員

(3) 会長等の選任について

千頭委員が会長に選任され、石川委員が会長代理に指名された。

(4) 議事

ア 愛知県環境学習等行動計画2030の進捗について

各主体の環境学習等に関する取組状況について各委員から説明。

また、事務局から資料及び参考資料1～3について説明。

イ その他

特になし。

【質疑応答・要旨】

ア 愛知県環境学習等行動計画 2030 の進捗について

(大谷委員)

飛島村では、小学4年生の子どもたちが調べてきた内容に対して、職員が答えるという形で環境教育を行っている。例えば、飛島村は小さな自治体であるが、なぜごみの排出量が多いのかという質問があった。飛島村は人口の分母が少ないため、1人当たりの排出量に換算するとき、ごみの排出量の増加の影響が大きくなると回答したが、子どもたちにうまく伝えるのに苦労した。

また、ごみの分別に関する環境教育の一環として、子どもたちが持っている小型ハンディファンにも使用されている産業用リチウムイオン電池の廃棄時の注意点について、動画を交えて啓発している。

他には、空き缶、段ボール、新聞紙などの分別について、小学校中学年からしっかりと教育したいと思っており、資源ごみを回収する「エコプラザ」の案内を毎年続けている。

(千頭委員)

4年生ぐらいであれば、大人のごみの出し方が悪いといった指摘はあるか。

(大谷委員)

結構厳しいことも話していた。

(梅村委員)

小牧市では、こども政策課が子どもに対し、文化・スポーツ課が生涯学習として大人に対し、環境学習を実施しており、環境対策課は、大谷委員からも話があった小学校4年生の総合学習で環境学習を実施している。知識より、まずは原体験として、身近な自然の大切さを感じてもらうことに力を入れている。自分の学校の校区内の川に入って、水生生物調査を行うが、川に入ったことがない子どもは結構多く、水の冷たさを知らなかったり、「川の中に生き物なんていない。」と言っていたりする。しかし、実際に川に入ると、タモ網でたくさん生き物が捕まって、最初は嫌がっていた子どもたちも、最後は川から上がってこない。そういった体験が、今後、環境を大切にしていこうという思いにつながる。水生生物調査は全16校のうち、5校で実施している。フィールドとなる川がある小牧市の上流部、山に近い場所で実施している。

また、水生生物調査を実施していない小学校の子どもたちと、外来生物であるオオキンケイギクの駆除活動も行っている。

他には、学校のカリキュラムとは別に、放課後児童クラブで自然環境学習会のようなことを行い、学校の校庭や近くの公園で草木を採ったり生き物を捕まえたりしながら、身近なと

ころにこんなに自然があるということを知ってもらおう活動をしている。

今年3月の小牧市環境基本計画の改定に当たり、1年前に市内全域に対して、環境に関する取組や知識に関するアンケートを行った。その結果、小学生も知識は十分あり、行動につながっているところもあるが、20代、30代、40代ぐらいの世代は一番行動ができておらず、50代、60代ぐらいの世代になると節電なども含めて環境に関する意識が高くなっているという傾向があった。忙しくなる20代、30代、40代の世代だと、容易に行動できないのかと思う。環境の知識は、皆ある程度持っているものの、行動につながらない部分があるということに対して、原体験により、環境を守っていきたいという気持ちを心の中に植え付けることが大切であると考え、取組を進めている。可能であれば、市内16校全部で、小牧市の子どもたちが小学生のうちに1度、そのような環境学習や体験をしたというような形にできればいいと思いながら取り組んでいる。

(千頭会長)

放課後児童クラブでも自然学習を行っているというのはいいと思う。

(梅村委員)

学校のプログラムとなると、カリキュラムも忙しく、実施が難しいため、そこをフォローする意味で、放課後児童クラブで実施している。

(千頭会長)

最近先生自身も川に入ったことがないという話を時々聞く。どうやって子どもたちを川に連れて行ったらいいのかという質問がきたりする。

(石川会長代理)

南山大学では、8学部、約1万人の学生が学んでおり、総合政策学部と国際教養学部が主に環境教育を担っている。総合政策学部は、大体1学年300人で4学年あり、学科としては総合政策学科がある。3年生からはコース制で、国際政策、公共政策、環境政策のコースがあり、また、環境系の教員は7名ほどで、7つの環境系のゼミナールがあり、そこで自身の卒業研究も含めて、深めていくというような区分となっている。通常の授業科目であれば、まず基礎的なものとして、環境政策論、環境知識だけではなく調べるための方法論などがあり、発展科目や応用科目も含めると環境系で約30科目がある。

座学だけではなく、学外体験として、いろいろな国内外のプログラムもある。国外の例としては、約10日間、ベトナムで現地の大学や学生、日本のNPOと一緒にマングローブの植林を行うという取組を実施している。また、国内の例としては、名古屋市やNPO、学生サークルと一緒に不要な衣類の回収をするという取組も現在進めている。

環境問題は、先ほど話にあったとおり、現場に行ってみるといろいろなことを学ぶ

必要があると思うが、大学の状況として、学生は1、2年生ぐらいからインターンシップがあり、3年生から就職活動がある。また、教員は入試関連の業務があり、土日も含めずと動いている。そのため、ゆとりを持って現場に行き、じっくり学習する機会を確保することがなかなか難しい。

一方で、県の事業である「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」を紹介すると、参加する学生もおり、今まで何度か南山大学から参加している。インターンシップもいいが、このような行政、企業、学生が一体となって進めるようなプロジェクトが、より一層進んでいくといいと思う。ゼミや研究室単位で、企業とコラボレーションしているところもあり、そういう意味では、大学主体で、企業や行政と一緒にあって、環境問題の課題解決に資するプロジェクトを起こしていければいいと思うが、時間的ゆとりの問題もある。その辺りを整理しながら、一緒にあって進めていければいいと思っている。

(千頭会長)

企業や行政との連携について、学生は伸びるが、先生が大変という課題があるかと思う。

(堀部委員)

東邦ガス株式会社は、地元で活動している企業として、かねてから環境教育を進めており、大きく分けて2つの柱で行っている。

1つ目の柱は、出前授業と称し、社員が愛知県、岐阜県、三重県の小中学校を訪問する環境教育である。この活動は2002年から実施しており、毎年コンテンツを変えて継続している。2024年度は120校、約4,000名の生徒を対象として、環境コース、省エネ料理コースといった内容で授業を実施している。

2つ目の柱は、東海市に当社が所有する「ガスエネルギー館」という施設の校外学習のコンテンツである。この施設は1995年開設当時から、小中学生をメインターゲットに環境啓発を実施している。2024年度は、温暖化対策や省エネ行動などをテーマとし、118校、約7,700名の生徒が参加した。

最近のトピックスとしては、石川委員の話にもあったが、地元の大学との連携ということで、学生に自社の主催する出前授業の教師をしてもらう活動に力を入れている。学生は、大学の授業、単位の1つとして参加することができ、当社は社員の負担が軽くなるということで、Win-Winの活動を進めている。

(千頭会長)

出前授業を行った社員に、何か反応や変化みたいなものはあったか。

(堀部委員)

主催する社員においては、毎年同じ学校ではなく、いろいろな学校に行き、いろいろな生

徒に話をしたいと強く思っている。

(原委員)

一般社団法人環境創造研究センターが実施している事業は大きく2つある。1つは、県から「愛知県地球温暖化防止活動推進センター」の指定を受け、温暖化防止に関わる普及啓発や企業の省エネ活動支援などを行っている。もう1つは、環境省の中部地方環境事務所からの請負で、「中部環境パートナーシップオフィス（EPO中部）」及び「中部地方ESD活動支援センター」の仕事を行っている。持続可能な地域づくり、あるいはそれを担う人づくりの支援を行うために、環境教育推進法に基づいて全国で8つ設置されており、本センターは、東海3県、北陸3県に長野県を加えた中部地方を担っている。

広域であるため、個別に対応しきれていない部分はあるが、汎用的に使えるツールや手法の開発に力を入れている。その成果の1つが、ESDの現場の企画について示した「ESD for SDGs 学び合いの場作りワークブック」である。この中のワークシートを埋めていくと、セミナーや校外学習などが企画できるようになっており、事例やノウハウの紹介もしている。1つでも多くの環境学習の現場が企画、運営されることを願って作成している。ネット上でも公開しており、ぜひ活用してもらいたい。

(千頭会長)

EPO中部が設置されて、20年が経過したか。

(原委員)

2005年に設置された。

(千頭会長)

汎用的なツールや手法について反響はどうか。

(原委員)

内容を理解すると使っていただける。このワークブックを使って、ESDの現場を企画するためのスキルを磨くワークショップを、豊田市環境学習施設「エコット」で試験的に実施したところ、とても強い関心を持っていただいた。その後、このワークショップで考えた企画が開催されており、実際に役立っていると思う。

(守安委員)

私は、公募委員、県民として、教育を受ける立場としての発言になるかと思う。日々の選択の中で、いい意味でたくさんさんのエコ活動が当たり前になってきている。例えば、節電しようとか、値段が同じならプラスチック容器より紙パッケージがいいといったことを選び、生活の中で

の環境に優しい選択は、あまり無理なく選べるようになってきていると思う。

最近様々イベントが開催され、先週末も県の大きな環境系のイベントに参加した。いろいろな立場の方の取組を見ることができ、ありがたいと思う。少しアンテナを張ったら参加でき、普段、環境に興味のない人も参加しており、「環境に興味はなかったが、参加してみたら面白い。どこに行ったらまた参加できるのか。」という話も聞いた。このようなイベントは間口が広く、参加しやすさ、行動のしやすさにつながると思う。一方で、受け身のイベントで、楽しただけで終わるともったいない。その次につながるものが暮らしの中にあるといいと思う。

息子が小学生だった時、「出前授業でこんな先生が来て面白かった。」「学校のこんな授業でSDGsに詳しくなった。」と話していて、私より息子の方がSDGsについて詳しくかった。教えてもらえる場が増え、与えられる情報は非常に多いが、直接の体験と結び付いていない部分がたくさんある。例えば、自分と深くつながったところでは、「昔入ったこの川には魚がたくさんいる。だから、この川は汚してはいけない。」と踏みとどまる選択ができる。しかし、知識だけでは、「それは分かるけれど面倒。」となってしまう。

体験の場がたくさんあるといいが、参加しやすいイベントが増えた一方、自然保護、川の護岸整備、公園の安全管理など、自然は遠くなっている。夏は暑くて外に行けないからとテレビを見ると、クマ、イノシシが出る、草むらでマダニがつく、ハチは怖いなど、自然と触れ合える場所がない。しかし、限られた場所でも、そこに良い指導者がいると、深い自然体験ができることも見てきた。愛知県にいる全ての子どもたちに、そういった指導者がいる場所が用意されていると良い。小学校中学年までの子どもは家族で移動することが多いため、親も子どもの目線を通して自然と再び触れ合うことができる。

また、小さい子どもたちに、こんな課題がある、地球を守ろうという話をする前に、たくさん自然に触れて、楽しんでもらい、自然は不思議で怖いこともあるが、大事だと実感してもらうことが重要である。愛知県はいいものもたくさんあるため、さらにこういった体験に参加できると、より良くなっていくと日々感じている。

(千頭会長)

ESDの世界でまさに言われている、学校での学び、家庭での学び、地域での学び、その連携も大事だということの実践かと思う。いろいろなイベントに参加されているということだが、情報は少しアンテナを広げたら入る状況であるか。それとも、さらに分かりやすい形で、県民にこの情報が伝わったらいいと感じているか。

(守安委員)

SNS媒体での発信はいろいろな人が見ており、また、冊子も昔より工夫がされ、手に取ってみたいと思えるものが増えた。選びやすくなっているが、いろいろな情報が多過ぎる面もある。単純に生活だけで忙しく、子どもたちは習い事がある。たくさんの情報があって

も、強い動機がないと手に取れない。これを手に取る理由がいると思う。

(三矢委員)

あいちの学び推進課は、生涯学習を担当しており、社会教育に関する内容を話す。PTA活動や学校を核とした地域づくりを目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携協働して行う様々な活動、いわゆる地域学校協働活動は、PTAだけではなく、地域の高齢者、成人、学生、NPO、地元の民間企業、団体等、幅広い地域住民等の参画を得て行う活動である。本課が把握している取組例としては、児童生徒と行う花壇の整備、資源の回収、書き損じはがきの回収、地域の湿原の生き物鑑賞会、米づくり、地元の特産品の栽培・収穫を通じた食農教育の推進など様々な活動がある。これにより、自然環境の大切さの理解、自発性や慈しむ心の育成、地場産業継承の重要性の学びにつながると思っている。

学校を核として、児童生徒、地域住民、保護者などがともに学び合う場となり、世代を超えた学びの場、育ちの場となっている。一方で、環境学習にもつながっているという捉え方ができていない可能性を少し危惧している。この活動が環境学習にもつながっていると伝えていくことが大切だと考えている。

(千頭会長)

3年ほど前に、県の社会活動推進課と、マルチパートナーシップの議論を2年程行った。いろいろなところで、行政、企業、大学、小中学校、地域団体を含めたマルチパートナーシップが大事だという話をいただいた。

(松尾委員)

公益社団法人愛知県私立幼稚園連盟には、第2教育研究部というものがある。そこでは環境に特化した研修会を企画、開催しており、私はそこで20年近く活動している。県内には、私立幼稚園が400園ぐらいあり、保育園、公立こども園と合わせるとかなりの園数があるが、少子化の影響で閉じている園も多く、子どもの減少で様々な活動に制約が出ている。今後ますますその傾向が進むことが危惧されている。

また、良き指導者という話があったが、保育者の担い手不足ということで、幼児教育を志す若者が減っている現状は、直接環境教育に結び付くわけではないが、とても大切な問題かと思っている。当連盟の研修は、自然が多い、少ないに関係なく、都会の幼稚園や自然に力を入れていない幼稚園の園庭などでも行っている。様々な園の先生が集まり、子どもと自然をつなげるにはどうしたらいいか、また、園庭づくりのヒントについて、専門家を招いて一緒に考えている。

先ほど話があった原体験とは、その人格に影響を及ぼすような自然体験のことを指すと思う。園の中で、深く感動するような自然体験は難しいが、幼児期の原体験の素晴らしさはたくさんある。例えば、石を見つける、並べる、明暗を感じる、冷たい、暖かいところを感

じる、虫を探す、花の蜜を吸う、虫に刺されるなど、数えたらきりが無い。その1つ1つが積み重なり、守安委員が言われたとおり、子どもたちにとって、不思議とか、面白いとか、そういう学びの力につながっていくと思っている。

全ての幼稚園が、園庭の自然を積極的に増やそうとしているわけではなく、少子化の流れの中で子どもたちを獲得するため、早期教育に舵を切るところもある。全園が同じ気持ちで向かうのはとても難しい時代になってきている。

園庭というのは、園舎と同様、子どもが学び、遊び、成長する大切な場であるが、この夏は暑さの問題で、園長会などで「最近外で遊んでいるか。」という挨拶がやり取りされる。また、豊田市ではマダニで亡くなった人たちがおり、市から案内が出されたが、保護者も過剰反応してしまう。園庭におけるリスクと安全管理、理解というところが、子どもたちの生活と離れたところで展開されていると感じている。

私たちは、子どもたちに自然を伝える指導者としての役割があるため、研修会を通じて、できるだけ多くの保育者に、自然の素晴らしさや園庭の大切さを伝えていきたい。

(千頭会長)

園庭という大事なキーワードが出た。今の話だと、保護者はどちらかというと、自然との触れ合いについて、さらに増やして欲しいというよりは、やや過剰に反応する人の方が多い印象か。

(松尾委員)

園風にもよると思う。私の園だと、マダニに関する案内について正しく情報提供すれば、特に反応はない。園によっては、先生が草を全部刈ってしまい、子どもたちが自然と触れ合う機会を逸してしまうことがあるので、そういう方向に安心を抱いているという保護者は多いのかもしれない。

(福井委員)

環境教育において、一番大事にしたいことは、先ほどから話に出ている原体験、実体験である。子どもの頃から遊ぶということが大事であり、そういうことを義務教育でもっと体験させたい。

会場に来る途中でカエデの実を拾ったが、これは上から落とすとひらひら回転しながら落ちる。私はこれを小学校1年生の生活科で必ず実践していて、子どもたちに体験させるととても喜んで遊ぶ。この植物の種には、何でこの羽根が付いているのかと疑問を持ち、子どもたちは遊びながら「植物ってすごい。」とリスペクトする。こういう原体験を通して、自然はすごいものだという気持ちを育てたい。名古屋市にも自然があり、カエデの実を拾うことができるが、これを拾う教師は少ないというのが現状である。

以前、校長として勤めていた知立南小学校の前には川がある。生活排水も流れていたが、

ここ数年で下水道もできて綺麗になり、魚もいる。しかし、これが教材になっていなかった。今から4、5年前に、総合的な学習の時間を使い、1年生から6年生まで、その川や周りにあるものを教材に生きもの学習を行った。まずは川に入ろうとなったが、ガラスなどが落ちているかもしれないので、胴長靴がいる。資金がないため、河川基金の約20万円を使って、胴長靴を購入した。4年生の子どもたちが川の中に入り、エビなどを喜んで捕まえ、それを飼うことができた。

また、3年生であれば、教材の中にチョウなどの虫が必ず出てくる。ただ勉強するのではなく、チョウが集まる場所を作ろうということになった。その場所を作るため、学校内の半分枯れたタマツゲの木を伐る必要があったが、学校の先生ではできず、地域のおやじの会に作業を依頼した。当初は子どもたちが好きな植物を植えていたが、おやじの会も徐々に関わりを深め、アサギマダラが集まるフジバカマを調達してくれ、一緒に植えた。子どもたちにフジバカマについて教えてくれ、フジバカマの資金も出してくれたため、学校も助かった。

他には、高学年がトンボやそのヤゴをプールで捕まえて育てていたが、プールではなく、学校の中にトンボの池を造ろうとなった。資金がないため、中部電力の教育振興助成に応募して、約30万円の助成をいただいた。この時も、おやじの会や近くの造園業の人たちに頼んで池を造り、トンボが来るかどうかを皆で観察した。本格的に子どもたちの近くにそういうものを作ろうとなると、資金や周りの人の支援が必要で、教員だけでは難しい。

現在は、知立南中学校の校長を務めているが、中学校になると、さらに子どもたちの時間がなくなってくる。地域のNPO「ナスもル知立」という団体に、学校に来て蛍の飼い方を教えてもらっている。このような取組をしてくれる団体に助成をするなど、地域やいろいろな立場の人たちが子どもたちと一緒に取り組んでいけるといいと思う。そこに、いろいろな生き物や環境に対するリスペクトがあって、大人も考え方が変わる。そうしないと、子どもは絶対に変わっていかないと思う。

子どもたちにただ知識を教えるのではなく、実体験を通じて、その裏にある自然の良さなどを伝え、それを地域や自治体、企業、皆がバックアップしてくれたら、いい教育ができるのではないかと常々思っている。

(千頭会長)

外部資金をうまく獲得したという話は、とても興味深く、また、蛍の話の中では、地域のNPOとつながっているという話があった。それは学校側から声をかけるのか、あるいは相手方から学校に対して打診が来る場合が多いのか。

(福井委員)

そのNPOは私も直接関わっていた。いろいろなことをやっている団体があるが、そういったことを皆が知っているわけではないため、なかなか活用できていない。

(千頭会長)

頑張っている学校は、うまく地域の力を、利用、活用しているかと思う。

(伊藤委員)

名城大学附属高等学校は、平成18年度から、文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」という事業の指定を受け、科学技術系の人材育成を目的に、教育開発に取り組んでいる。名古屋市中村区にあり、学校の北側には庄内川が流れている。近くで活動している「庄内川・矢田川をきれいにする会」という団体から声がかかり、平成18年度頃から現在まで実施している庄内川の水質調査、生態調査、研究発表等などの活動がトピックの1つである。

また、先ほどから原体験が非常に大事だという話がある。私の趣味は登山とキャンプで、例えば山に行くと、トイレは有料で、水も雨水が1リットル100円とか200円で売られている。あるアルプスの頂上でテント泊をしていたところ、小学校中学年ぐらいの子どものいる家族が頂上に着いて、子どもがトイレに行ったが、トイレには1回200円と書いてあり、自分の全財産だと言っていた。それが非常にスモールスケールな生活環境の教えになる。これは極端な環境であるため、少し敷居を下げると、キャンプはいいと思っている。昔、自治体は青少年のためのキャンプ場等を整備していたが、今はほとんど朽ちている状態である。それが、民間によって再生されている例があるが、非常に高額で、お金のある大人のための施設のようになっているところも多い。名古屋市の小幡緑地の「オバッタベッタ」というキャンプ場は、やや高価であるものの、名古屋からのアクセスが非常に良く、レストランもあり、安全な環境でキャンプができる。先ほど20代、30代、40代の世代が、環境教育と離れてしまっているという話があったが、その世代は、おそらく原体験を要する子どもがいる世代かと思う。行政が環境整備をしながら、安価にキャンプができるような仕組みを考えると、環境教育の一つのアイデアかと思った。

(千頭会長)

私も昔は山に行っていた。そこでは教えられた気づきではなくて、自分で気がつくという本来の気づきがたくさんあると思っている。

(川手委員)

県立津島高等学校は、この4月に附属中学校が開校し、愛知県立学校としては、初めての中高一貫教育校の1つになった。国際バカロレア教育を導入しており、人類、地球、未来、平和、要するに様々な人々のために尽くせる人材育成を目指している。まず県立高校の立場で一般論から話すと、環境について、理科や社会の授業はもちろん、国語や英語の読み物でも扱っており、環境に課題があることを、多くの子どもたちが知識としては知っている。それに対するアプローチとして、現在、高校では総合的な探究の時間、中学校では総合的な学習の時間がある。様々な知識を結び付けた応用的な学びの時間が授業の中に盛り込まれ、学

校によっていろいろな使い方をされている。

本校の場合、総合的な探究の時間をベースに、地域の自然、文化、歴史などについて、生徒たちが課題意識を持ち、自分たちで掘り下げるという活動をしており、中には、非常にいい形で実を結ぶものがある。例えば、制服を作ったときの端切れをアップサイクルしようということになり、その製品の制作や販売を障害者団体と協力して行い、収入は団体に入るような形で取組を進めている。また、他にも中部国際空港セントレアで、SAF燃料、すなわち不要な食用油を航空燃料に作り替える話を聞いた子どもたちが、文化祭で不要な油を集め、高校生らしさのあるいい活動ができた。

一方で、ストレートに自然環境に目が向いている子どもがいるかということ、なかなかない。原体験の話につながるが、今の子どもたちの自然体験の状況は、私たちの子ども時代と比較できないくらい弱い。守安委員が言われたとおり、こういった体験が意識に結び付くと私も共感している。自然体験を進めることができる優れた指導者は何人もいるが、例えば、受験に結び付かないといった意見により、そのような方が学校の中で活躍できない場面もある。

優れた指導者から自然体験のない若い教員に、しっかりと文化を伝承してほしい。そのために、学校自体、それから県民、地域住民が、学校に求めるものは何かということもじっくり考える必要がある。例えば、入試的なゴールを求めるのか、子どもたちの豊かな人生を求めるのかということ、本来なら後者であってほしい。そのような時、環境に対する意識や未来的な視野は重要であり、これを上手に育むこと、また、学校が地域に発信し、協力を得ながら進めていくことが大事であると思っている。

本校は、少し特別な学校になっているが、その特別さを活かしていきたい。今年、初めて中学生を迎え入れたが、先生が教えるのではなく、あまり制限をかけずに、自分たちで課題を見つけ、解決するという、自分たちで学ぶ学校という形にしたところ、子どもたちはとても楽しそうにしている。楽しいだけではなく、いろいろ身に付けるものもあるようで、この子どもたちの6年後が非常に楽しみだと思っている。

(千頭会長)

自分で考え、見つけ、学んでいくということは、とても大事なことだと思う。言われたことはできるが、自分で考えることができない子どもは少なくないと感じている。これからの成果が楽しみで、来年度も状況を紹介していただけたらと思う。

(高木主任指導主事)

愛知県教育委員会の立場から、現在取り組んでいる環境学習について、5点説明する。

1点目は、高校生に対する支援である。教育委員会では、「あいちSTEM教育推進事業」において、大学等と連携し、生物多様性や環境についての探究活動を通じて、生徒の環境保護に対する理解を深める取組を行っている。また、「キャリア教育推進事業」において、イ

インターシップ等、産業界とつながり、生徒が環境に配慮した取組の重要性を学ぶ機会を設けている。

2点目はユネスコスクールへの支援である。ESD活動の推進拠点であるユネスコスクールの活動を充実させるために、関係機関からの講師等の派遣、ネットワークの構築、ユネスコスクールの全県的な広がりを目指した交流会などを実施している。

3点目は、環境学習についての教員の研修である。名古屋市を除く全ての小中学校の教員に配布している教員研修の手引きに、環境教育という項目を立て、環境に関する活動例、授業例、義務教育の9年間を通した学習例などを掲載している。また、小中学校、高等学校、特別支援学校の1年目の初任者に対する宿泊研修において、環境への理解を深めるため、SDGsに関する講習、自然体験活動等を実施している。なお、今年度については、カムチャッカ半島の地震による津波の影響で、残念ながら高校では研修体験ができなかった。さらに、「ESD・SDGs推進指導者研修会」を開催し、SDGsの普及促進を実施できる教職員の育成に努めている。

4点目は、生涯学習情報システム「学びネットあいち」の活用である。生涯学習に関する情報を総合的に提供するウェブページを運営しており、環境学習に関する情報や自然科学、環境分野の人材に関する情報を登録してもらい、環境学習の推進を支援している。

5点目は、地元で収穫された食材を使用した「愛知を食べる学校給食の日」の実施である。地場産物や地域に伝わる郷土料理、正月のおせちといった行事食等の良さを広く知ってもらうために、全ての公立小中学校、義務教育学校、県立、市立の定時制高校、特別支援学校で、年に3回実施している。地産地消について理解を深め、食の大切さや環境への配慮を考えてもらうため、県産食品を使用するように努めている。

愛知県教育委員会としての説明は以上であるが、私が小さかった頃、山育ちの父に連れられ、身近な草について食べられるか食べられないか教えてもらったことを、皆様の報告を聞きながら思い出した。

(千頭会長)

身の周りの植物が食べられるかどうか研究している大学の先生もおり、いい体験だったかと思う。また、ユネスコスクールも数が減ってしまったが、残っている学校はとても頑張っていて、いろいろな取組をしている。

(千頭会長)

日本福祉大学の国際学部は小さく、1学年に約80人しかいないが、様々な国の留学生がおり、15言語ぐらいをカバーしている。留学生は国籍を問わず、4月1日から日本人と同じように勉強している。今年の前半で2年生に、シンハラ語、ビルマ語、ネパール語、ベトナム語、英語、タイ語で、それぞれの言語と文字を使ったおそらく世界初のSDGsかるたを作ってもらった。例えば、シンハラ語の文字を頭にしたかるたで、日本語訳もつけてある

ため、スリランカ人と日本人であれば、一緒に遊ぶことができる。そういうものを作るプロセスの中で、SDGsとは何か、あるいは自国のスリランカはどのような状況かといったことを勉強させている。

(成瀬主査)

資料及び参考資料1、2により説明

(河田主査)

参考資料3により説明

(千頭会長)

本日は、皆様から活動状況などの情報共有をしてもらった。各委員がそれぞれの立場で様々な活動をしている中で、県が何をすればさらに活動が盛り上がり、広がり、深まるのか。単なる要望ということではなく、広く環境教育、環境学習を推進していく上での、県の役割というものを考えていくことも、この協議会としては大事だと思っている。

(原委員)

各委員からの話の中で、原体験の不足という点が強く指摘された。原体験を確保していくためのアイデアについて、伊藤委員から少し話があったが、県の関係部署は、公園やその公園を運営する主体、プログラムなど、いろいろな資源を持っている。それを、ここに行くところこんな体験ができるといった旅行会社のプログラム一覧のような形にして、小中学校に届けることができると、さらに利用してもらい、原体験が進むのではないか。そういった情報の整理と発信は重要かと思う。

(千頭会長)

県は環境学習施設について既に「AELネット」を運営しているが、原体験や自然体験ができる場所の情報提供があればいいという話だったかと思う。事務局に個別回答してもらおうという形にはしないので、参考にしていきたい。

また、福井委員の話であったように、自分たちの身近なところで、地域の協力を得ながら探していくことも大事かと思う。

(福井委員)

県がそういう資源を持っているのであれば、学校の先生たちがさらに気軽に活用できるような環境づくりが進むと良い。子どもたちは、時々どこか遠くに行くことも大事であるが、近い地域でないと頻繁に観察できないということもある。いろいろな話を聞いてきたが、それらがつながって、広がりができるといいと思う。

(石川委員)

南山大学が名古屋の街中にあるということもあるが、今の若い学生たちを見ていると、栄や名古屋駅周辺で過ごすことが多く、子どもの頃に少し原体験をしても、急速に街の中に志向がいつてしまう。まず身近な地区、市町村単位で、原体験をすることは、とても大事だと思う。ただ、名古屋市で授業をしていると、街に住んでいる学生は、意識的、距離的、時間的にも、急速に自然が遠くなっていると感じる。先ほど自治体運営のキャンプ場の話があったが、気楽に行ける場所をどんどん紹介したり、例えば、社会人が一斉に休める期間を利用して、名古屋の人たちは子どもたちと、他の市町村の自然のあるところに行ったりというのもいい。県としては、やはり市町をまたぐような取組も大事ではないか。県民が街から外に出る機会を作っていくといいと思う。

(千頭会長)

名古屋市内でも、例えば藤前干潟など、素晴らしい場所がある。ただ、名古屋市の学校で、藤前干潟に行くところは意外と少ない。それは、情報がうまくキャッチできていない、うまく発信できていないというところに課題があると思うか。

(石川委員)

情報はたくさんある。あり過ぎて、どのようにキャッチすればいいか分からないところもあるため、少し整理してもいいのではないか。たくさんの事業があり、それらを上手に集約していくことも必要ではないかという気がする。

(千頭会長)

原委員の話にもつながるかと思う。

(守安委員)

自然のことを伝えたい人は多く、いろいろな現場で手弁当で頑張っている。しかし、その善意だけに頼り過ぎてもいけないし、伝えたい気持ちだけが先に出てしまって、次につながらない体験となってしまうのはもったいない。

県では、適切なものや人をつなぐコーディネート事業を行っているが、ここをさらに強化したり、また、自然を深く理解している指導者をさらに増やしたりすることで、体験の質が上がっていくと思う。県という大きな枠組みの中では、体験の数ではなく、質を上げるための取組がさらに増えて行けばいいと思う。

(千頭会長)

たくさんある情報の整理の必要性、指導者の話、コーディネートの大切さなどについて話

があった。本日予定していた内容は以上かと思うが、武田委員から何か意見はあるか。

(武田委員)

行政・企業・学生が一体となる「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」のような取組がさらに進むとよいという話、また、企業において、出前事業や校外学習などの学びの場を提供している話、いろいろな環境イベントなどへの参加や環境に優しい選択がしやすくなっているという話など、皆様から大変貴重な意見や話をいただいた。全体としては、環境教育への理解が進み、場が整えられてきていると感じる。

原体験に関する県の事業について、施設に来ていただき自然を体感してもらう「もりの学舎ようちえん」を例に挙げた。他にも「もりの伝道師」という施設外での出前授業や、三河湾で海に入って自然を体感してもらうイベントなど、いろいろな事業を実施しているが、指摘があったとおり、情報の整理や発信ができていないところがあるかもしれない。公園についても、部局をまたいで様々な事業を行っており、それらがつながっていないところもある。そのような情報をさらに整理していけたらと思った。今後も様々な意見をいただき、県の環境教育、環境学習にしっかりと反映できるように、取り組んでいきたいと考えている。